

戦後学校体育における「ベースボール型」授業に関する研究

進藤 亮祐 長見 真

キーワード：ベースボール型，学校体育，楽しい体育論

A Study on the "baseball type" lessons in physical education

Shindo Ryosuke Nagami Makoto

Abstract

The purpose of this study was clarified the reality of "baseball type" lessons. As the result of analysis and review, the following things became clear.

In the "Age of New Physical Education", "baseball type" lessons had been positioned as a ball game area with the aim of the whole physical education.

In the "Age of emphasis on Physical Fitness Promotion", "baseball type" lessons had been positioned as a ball game area with the aim of ball games.

In the "Age of emphasis on Fun", "baseball type" lessons had been positioned as "baseball type" with the aim of each ball game type.

The percent of "baseball type" lessons was less compared to the other types ("net game type", "goal game type") from the magazine of "Physical Education".

However, it was found that "baseball type" lessons increasing in recent years.

In recent years, many P.E. lessons which emphasized the "competition" based on "TANOSI-ITAIKURON" had been done.

However, in the following several years, P.E. lessons to obtain skills and tactics had been done more, and they were obviously different from the "TANOSIITAIKURON".

Key words : "baseball type" lesson, School physical education, TANOSII TAIKURON

1. 問題の所在と研究目的

日本の体育学習における、戦後から現在までの学習指導要領の変遷をたどると、昭和22年の学校体育指導要綱の小学校3年生からフットベースボールの授業が内容欄で扱われるようになったのが本研究のテーマである「ベースボール型」授業の始まりである。昭和33年学習指導要領、昭和43年学習指導要領でも引き続き「ベースボール型」授業は内容欄で取り扱われた。昭和52年の小学校学習指導要領で「ベースボール型」授業は一切取り扱われず、すべて削除された。平成元年の小学校学習指導要領では、ハンドベースボールやソフトボールなどの「ベースボール型」授業が復活した。また、平成20年改訂の学習指導要領では、ボールゲーム・ボール運動領域で「〇〇型ゲーム」というカテゴリーが採用され、ゴール型、ネット型、ベースボール型と表記されるようになった。

今回の改訂によって、これまでの種目固有の技能ではなく、「型」に共通する動きや技能を身につけることを重視する授業が目指されている。「型」という広い概念での授業を計画することができるようになったため、「ベースボール型」授業の実践研究は増えているのではないかと考えられる。実際に雑誌「体育科教育」平成25年10月号では特集で「ベースボール型ゲームの授業計画」が組まれるなど注目を浴びているのは確かである。

そこでの授業実践事例ではどのような目標、ねらいで行われているのだろうか。また、戦後から現在まで「ベースボール型」授業がどのような位置づけで変遷してきているのだろうか。これらは、明らかになっておらず、研究の意義があるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、戦後から現在までの我が国における「ベースボール型」授業の取

り扱いについて記載された学習指導要領や先行研究および文献・雑誌などから「ベースボール型」授業に関する資料を収集し、それを体系的に整理した上で、「ベースボール型」授業の実態を、歴史的視点から明らかにすることを目的とする。

2. 研究の手順

まず、「ベースボール型」授業の戦後から現在までの実態を明らかにする。そのために、学習指導要領にて「ベースボール型」授業がどのように位置づけられてきたか、またどのような目標、ねらいで取り扱われてきたのかについての変遷を明らかにする。

次に、体育専門雑誌「体育科教育」（昭和28年～平成25年）における戦後から現在までの「ベースボール型」授業の取扱件数を他の型と比較し、明らかにする。また、そこであげられた「ベースボール型」授業の実践事例を抽出し、「ねらい」の変遷を見ていくこととする。

「ベースボール型」授業の実態については、友添（2009）による、戦後からの体育を各要領に示された目標を時代的な特徴によって3つに大別したものに基づいて考察していくこととする。友添は、戦後の学習指導要領の変遷を「新体育の時代（昭和22年要綱、昭和24年、昭和28年要領）」、「体力づくりを重視した時代（昭和33年、昭和43年要領）」、「楽しさを重視した時代（昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年要領）」と区分している。

「新体育の時代（昭和22年要綱、昭和24年、昭和28年要領）」は、戦後の体育は戦前の軍国主義的な体育の払拭が大きな課題となった。具体的にはアメリカ体育の中心的思潮であった経験主義教育を基盤とした「新体育」の全面的導入から始まった時代である。

「体力づくりを重視した時代（昭和33年、

昭和 43 年要領)」は、先の新体育の時代では生活中心の経験主義が行われた事で、基礎学力の低下が問題とされるようになった。ここから、科学の体系を重視する系統主義教育への転換が行われた時代である。

「楽しさを重視した時代(昭和 52 年、平成元年、平成 10 年、平成 20 年要領)」は、1970 年代以降始まった工業化社会から脱工業化社会への転換は、人々の生活を大きくかえると同時に、スポーツが社会や文化の重要な一領域として認知される契機を生み出した。具体的には、ヨーロッパを中心に始まった「スポーツ・フォー・オール (sport for all)」運動は、スポーツや運動を健康のためだけではなく、生涯の楽しみとして享受すべきとする生涯スポーツへの理念に結実していった。このようなスポーツや運動への人々の需要の変化は、運動を手段として用いる「運動による教育」から運動やスポーツそれ自体の価値を承認する「運動・スポーツの教育」への体育概念の転換をもたらした。この転換は日本の要領にも大きく反映されていった時代である。

続いて、近年、実践が活発化している「楽しさを重視した時代」の平成 20 年学習指導要領改訂後の雑誌「体育科教育」内における「ベースボール型」の授業実践の分析を行う。そのために、「楽しさを重視した時代」において重要なワードとなってくるのが「楽しい体育」論であり、「楽しい体育」論を手がかりに見ていく。

3. 学習指導要領から見る「ベースボール型」授業の取り扱いの変遷

「ベースボール型」授業がこれまでどのように学習指導要領において変遷してきたのかを昭和 22 年の学校体育指導要綱から平成 20 年までの学習指導要領の目標の変遷とともにみてみる。

3.1 新体育の時代(昭和22年要綱、昭和24年、昭和28年要領)

新体育の時代において、体育の授業では、スポーツが主たる教材として扱われてきている。体育の授業で、「スポーツを行ってさえいれば、ルールやマナーを遵守し、その結果として自然と社会性が身につくと考えられていた。」(眞榮里、2006) という背景のもと、民主的人間形成を目標としていた時代であった。ここでは、「ベースボール型」授業は「球技」の中の一領域として位置づけられていたが、具体的な目標、ねらいは示されず、体育の目標、ねらいとして「好ましい人間関係(社会的態度)の育成、施設や用具の整理と活用、健康習慣と安全、身体的発達上の効果」(昭和 28 年要領小) などといった目標、ねらいに基づいて行われていた時代であった。

3.2 体力づくりを重視した時代(昭和33年、昭和43年要領)

体力づくりを重視した時代において、「ベースボール型」授業は「ボール運動」、「球技」として位置づけられた。「昭和 33 年要領小学校」、「昭和 43 年要領小学校」で、「片手で持ったボールを他の手で打つ。ゴロやフライボールを捕えてベースに投げる。投げられたボールを捕える。走塁をする。」(昭和 33 年要領小) などといった、「ベースボール型」授業それぞれの種目においての目標、ねらいが示された。「昭和 33 年要領中学校」、「昭和 33 年要領高等学校」、「昭和 43 年要領中学校」、「昭和 43 年要領高等学校」で、「運動の技能を養い、簡易な規則によるゲームができるようにする。」(昭和 33 年要領中)、「球技の技能を養い、規則を守り、攻防のしかたを考えてゲームができるようにする。」(昭和 43 年要領中) などといった球技の目標の中に位置づけられた目標、ねらいであった。体力づくりを重視した時代では、基礎的運動能力や運動技術の向上を目標とした

時代であった。「ベースボール型」授業は、小学校学習指導要領では種目として位置づけられた目標、ねらいであった。中学校、高等学校学習指導要領では、球技の目標、ねらいとして位置づけられた時代であった。

3.3 楽しさを重視した時代(昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年要領)

楽しさを重視した時代において、「昭和52年要領小学校」で「ベースボール型」授業は削除された。「昭和52年要領高等学校」、「平成元年要領小学校」、「平成元年要領中学校」、「平成元年要領高等学校」、「平成10年要領小学校」、「平成10年要領中学校」、「平成10年要領高等学校」で、「球技領域」、「ボール運動領域」や「ゲーム領域」と位置付けられた。「平成20年要領小学校」、「平成20年要領中学校」で、型表記になり「ベースボール型」と位置付けられた。「平成20年要領高等学校」で、「内容欄」の「スポーツⅡ」でソフトボール、野球が位置づけられた。楽しさを重視した時代では、運動への愛好的態度の育成を目指した時代であり、目標、ねらいは「運動の技能を習得し、集団的技能を生かした攻防の仕方を考えてゲームができるようにする。チームにおける自己の役割を自覚して、その責任を果たし、互いに協力して練習やゲームができるようにする。」(昭和52年要領中)といった球技の目標、ねらいという位置づけから「ベースボール型ゲームでは、蹴(け)る、打つ、捕る、投げるなどの動きによって、易しいゲームをすること。」(平成20年要領小)といった型それぞれの目標、ねらいという位置づけへと変わってきている時代であった。

4. 雑誌「体育科教育」における各型の取り扱い件数の変遷

ここでは、体育専門雑誌「体育科教育」における「ベースボール型」授業に関する取扱

い件数を他の型(ゴール型、ネット型)と比べながらみていく。ここでカウントする取り扱い件数については、該当する競技について書かれている実践研究やコラムなどすべてをカウントした。

抽出結果、ベースボール型に関する取扱いは60件、ネット型に関する取扱いは133件、ゴール型に関する取扱いは341件であった。

4.1 新体育の時代(昭和22年要綱、昭和24年、昭和28年要領)

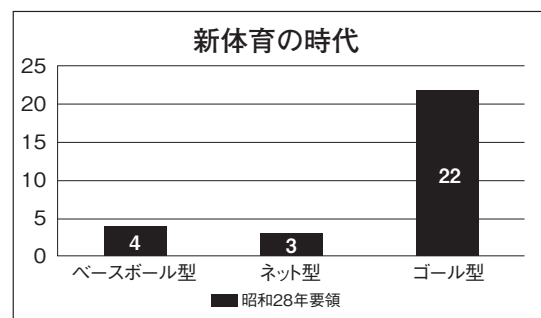


図1 新体育の時代の取り扱い件数

新体育の時代においては、ベースボール型の取扱件数は、4件、ネット型が3件、ゴール型が22件であった。

4.2 体力づくりを重視した時代(昭和33年、昭和43年要領)

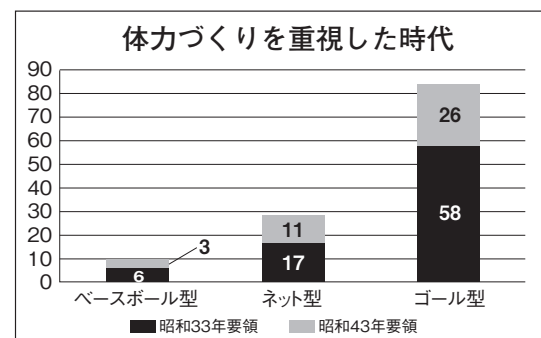


図2 体力づくりを重視した時代の取り扱い件数

体力づくりを重視した時代においては、ベースボール型の取扱件数は9件、ネット型が28件、ゴール型が84件であった。

4.3 楽しさを重視した時代(昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年要領)

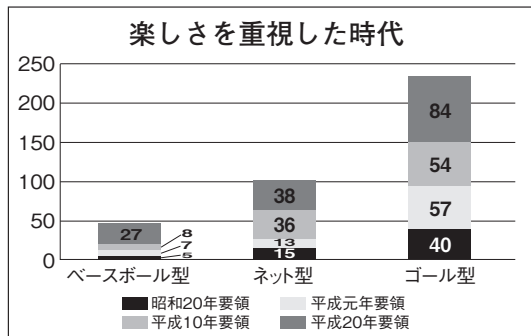


図3 楽しさを重視した時代の取扱い件数

楽しさを重視した時代においては、ベースボール型の取扱件数は47件、ネット型が102件、ゴール型が235件であった。

以上のことから、「ベースボール型」授業は「新体育の時代」では他の型と比べて少ない取扱いであることが分かった。「体力づくりを重視した時代」においても、「新体育の時代」に引き続き、取り扱いがあったものの他の型と比べては少ないという結果となった。「楽しさを重視した時代」では、先の2つの時代と変わらず他の型と比べては少ない取り扱いだった。また、平成20年改訂の学習指導要領にて、「ベースボール型」と型表記になったことで、授業実践の事例研究が近年増加してきている。

5. 雑誌「体育科教育」における「ベースボール型」授業の実践事例のねらいの変遷

「ベースボール型」授業の実践事例のねらいの変遷をみていく。授業実践は体育専門雑誌「体育科教育」内に出てくる「ベースボール型」授業に関するものを抽出した。授業実践事例を抽出した結果、26件の授業実践からねらいが読み取れた。

5.1 新体育の時代(昭和22年要綱、昭和24年、昭和28年要領)

2件の「ベースボール型」授業の実践事例でねらいが示されていた。「正課時の指導は、ソフトボールについて初

めから最後まで浅いながらも全部授ける」(石黒、1956)などといったねらいが示された。種目において技術のすべてを授業で教えようとしていることがねらいから読み取れる。民主的人間を形成するために体育の授業が行われていた時代であるが、「ベースボール型」授業の目標、ねらいからは、民主的人間形成を目指されて行われていたかどうか読み取ることができなかった。

5.2 体力づくりを重視した時代(昭和33年、昭和43年要領)

1件の「ベースボール型」授業の実践事例でねらいが示されていた。

「1. ゲームの進め方と規則、用語の指導。2. 攻撃法とその防御の指導。3. ゲームの練習法の指導。4. 審判法の指導。5. ゲーム中の注意すべきことの指導。」(坂井、1961)といったねらいが示された。ゲームにおける知識・技術の習得、並びに自分たちだけでゲームが行えるレベルまでの指導を行おうとしている。まさに、体力づくりを目指した時代に見合った授業実践事例だったのではないかと考えられる。

5.3 楽しさを重視した時代(昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年要領)

23件の「ベースボール型」授業の実践事例でねらいが示されていた。

「ドリルゲーム、タスクゲームで身につけた技能を発揮し、ゲームを楽しむ」(清水ら、2013)などといったねらいが示された。先の2つの時代では、「ベースボール型」授業では、種目においての技術のすべてを行おうとしているねらいで授業実践事例が多く行われていたが、近年の「楽しさを重視した時代」に変わっていくことで、運動の楽しさにふれることや喜びを味あわせていくための授業実践の目標、ねらいへと変遷している。しかし、「相手をアウトにするために(状況判断をして)守備位置を工夫するゲーム」(渡邊、2012)などといったねらいの授業実

表1 「楽しい体育」論を志向した授業実践モデルと雑誌「体育科教育」内の19の授業実践事例一覧

	年月	タイトル	著者名
授業実践事例	学校体育1994年6月	どの子も特性を味わえるソフトボールの工夫—ティーバッティングソフトボール	田中佐俊
授業実践1	2009年2月号73P	ソフトボールのゲームパフォーマンス向上をめざして	岡出美則, 川村卓, 中垣貴裕, 本田雅輝
授業実践2	2009年3月号58P	「探求型」と「習得型」の関連を図った「ベースボール型」授業	立木正
授業実践3	2010年3月号38P	ベースボール型ゲームの指導計画—単元計画のデザイン過程を中心に	垣内幸太
授業実践4	2010年12月号74P 2011年1月号66P	『ボール操作』を中心にしたティーボールの指導と評価①, ②	村上彰彦, 木原成一郎, 松田泰定
授業実践5	2011年3月号42P	ベースボール型ゲームの教具づくりと「グッドベースボール」の実践	光本允
授業実践6	2011年4月号38P	ベースボール型球技の教材開発と見えてきた課題	吉中孝志
授業実践7	2011年5月号10P	ベースボール型ゲームの教材の系統性を探る	岩田靖
授業実践8	2011年5月号20P	走者と守備の対決場面に焦点を当てた5年生のハンドベースボール	大友宏幸
授業実践9	2011年5月号30P	攻撃側のバッティングと走塁の面白さを味あわせる教材系統を提案する	垣内幸太
授業実践10	2012年6月号42P	ベースボール型ゲームでラケットを振り切れるティーの開発	橋本浩司, 福ヶ迫善彦
授業実践11	2012年6月号73P	ボール運動・球技の授業における教材開発	土田了輔, 宮崎あさひ
授業実践12	2012年11月号46P	学校経営とティーボール	渡邊和紀
授業実践13	2013年10月号18P	守備側の判断と投能力の向上を企画した連携バックホームベースボール	清水将, 浜上洋平, 中嶋基樹
授業実践14	2013年10月号22P	動いているボールを打つ学習指導に焦点を当てた授業計画とその実践	梶井大輔, 光本允
授業実践15	2013年10月号26P	初めてベースボール型を学ぶ小学校3年生のための授業計画	古川勝哉
授業実践16	2013年10月号30P	伝承遊び「ろくむし」を通して学ぶベースボール型の構造	石塚諭
授業実践17	2013年10月号34P	相手に得点させないことを核にした授業展開の可能性を探る	幸坂浩
授業実践18	2013年10月号38P	小学校6年生から中学校1年生につなぐ授業計画と2年間の実践	原和幸, 高下隆史, 福ヶ迫善彦
授業実践19	2013年10月号64P	教師が子どもと創るフライング・ベースボール	前場裕平, 穴吹哲郎, 米村耕平

践もあり、23件のねらいすべてが楽しさを重視したねらいではなかったが多くの授業実践では重視していたと考えられた。

6. 「楽しさを重視した時代」の平成20年学習指導要領改訂後における「ベースボール型」授業のとらえ方について

「楽しさを重視した時代」において重要なワードとなってくるのが「楽しい体育」論である。ここではまず、「楽しい体育」論を手がかりにして、運動の楽しさについての整理を行った。「楽しい体育」論についてまとめると、各々の運動・スポーツが持つ楽しさ（機能的特性）の学習を中心に、楽しく運動の学習を「今持っている力で」進めていく授業といえるのでないだろうかと考えた。

ここで、「楽しい体育」論を志向した授業実践事例（田中、1994）と「型表記」に変わった平成20年改訂の学習指導要領以降のもの19の授業実践事例（表1）を2つの視点で見えていき、比較・分析を行った。

1つ目は「競争」の視点である。ゲームの中でどのような競争が行われていくのかを

見ていく事とする。「楽しい体育」論を志向した「ベースボール型」授業では、ゲームにおいて相手と競い合うこと、つまり競争するという事すべてが「楽しい体育」論に基づく授業であるとした。その中で、何を重視した授業なのかを「競争」という枠組みの中でも区分していく事ができると考えた。

2つ目は、「学習過程」の視点である。どのような学習過程で授業が行われていくのかを見ていく事とする。「楽しい体育」論を志向した「ベースボール型」授業では、「今持っている力を使ってゲームを楽しみ、作戦を工夫してゲームを楽しむ」という事が学習過程であるとした。

19の授業実践を2つの視点から見ていくと以下のようにまとめることが出来る。

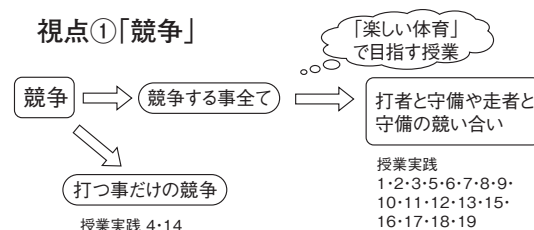


図4 視点①「競争」

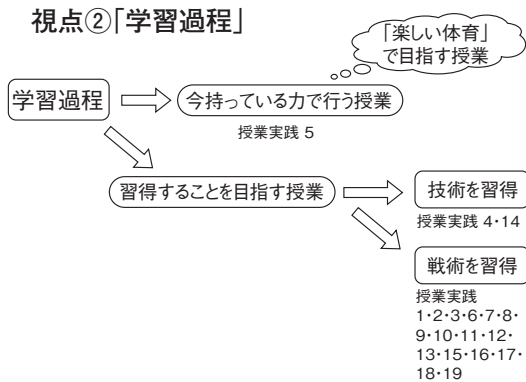


図5 視点②「学習過程」

まず、視点①の「競争」(図4)という視点で授業実践事例を見ていくと2つのとらえ方に分けることが出来た。

1つ目は、「競争」すること全てを目指した「楽しい体育」論を志向した授業である。「ベースボール型」授業では、ゲームにおいて相手と競い合うこと、つまり競争するという事すべてが「楽しい体育」論に基づく授業という事とされていた。その中で、打者と守備や走者と守備の競い合いが行われていたのが授業実践1・2・3・5・6・7・8・9・10・11・12・13・15・16・17・18・19であった。これらの授業実践では、「打つ」事から始まる守備との競い合いや走者と守備の競い合いなどの「競い合い」という視点が授業の中でのおもしろさ、楽しさを味わう中心としておかれていた。

2つ目は、「打つ」事だけの競争の授業である。授業実践4・14では、ボールを打ち、飛んだ距離を競い合う授業が行われていた。「打つ」事だけの競争を視点として授業が行われると「ベースボール型」授業の「楽しさ」の一つである、ランナーとボールの競争は行われなくなってしまう。授業実践4・14では、「簡単なルールでゲームをしよう」や「動いてるボールを打つ」といったねらいのもとで実践が行われていた。「打つ」という手段は実践中の一つの手段にしか過ぎないのではないのではないかと考えられる。

次に、視点②の「学習過程」という視点で授業実践事例を見ていくと2つのとらえ方に分類することが出来た。

1つ目は、今持っている力で行う「楽しい体育」論を志向した授業である。「ベースボール型」授業では、「今持っている力を使ってゲームを楽しみ、作戦を工夫してゲームを楽しむ」(田中、1994)という事とされていたが、それに基づいて行われていたのは授業実践5だった。授業実践5では、今持っている力でできる用具・場の工夫を行い、「ベースボール型」授業を行った。授業実践5は、手で打つ「ベースボール型」授業である。自分たちにあったボールを使い、手で打つ練習を行ってから、ゲームを行った。この方法なら体の未成熟な小学3年生でも「ボールを思いっきりかっ飛ばす爽快感」を味わわせることができる授業実践であった。

2つ目は、習得することを目指す授業では、技術と戦術を習得することを目指す授業である。技術を習得することを目指す授業では、授業実践4・14であった。授業実践4・14では、「打つ」技術の習得が目指された。「ベースボール型」が教材にされにくかった1つに「打」の技能の難しさをあげている。授業実践では、基礎的スキルの習得する練習を行い、そこから第1ゲーム、第2ゲームへと学習過程を進めていく事で技術の習得を目指す授業実践であった。

戦術を習得する授業では、戦術学習に着目した実践が多く見受けられた。授業実践1・2・3・6・7・8・9・10・11・12・13・15・16・17・18・19がドリルゲームやタスクゲームを授業内で行ってからメインゲームへと移っていく授業や一次ゲームから二次ゲームへと移っていく授業実践であった。

戦術学習とは、「ゲームを行うために「何をするか」「それをどのように行うか」に関して意思決定を適切に行う能力を身につけ

るために、戦術的な気づきや知識を理解することやゲームでの出来事を予測することについて学習すること」(石井、2009)である。

戦術学習という手段は、「楽しい体育」論の問題性を乗り越えるための手段の一つともいえるのではないだろうか。「楽しい体育」論では、それぞれの運動の特性にふれさせ、楽しさを体験させることが強調されてきた。「そこでは「できること」や「わかること」が軽視されたわけではないとしても、いつしか「楽しさの経験」と「技能の学習」とが対立的にとらえられる傾向を生み出してきた。」(高橋、2010)というような問題性もあった。しかし、戦術学習を行う事は単元で一つのゲームを行っていくのと比べ、ドリルゲームやタスクゲームを用いることでたくさんのゲームを行い、児童・生徒が混乱してしまうのではないかという問題点も生まれてくる。

戦術を学んで授業を行うことや技術を習得して授業を行うこと、これらはどちらも先生が課題を出さないことでは楽しさを常に味わうことはできない。そのような点では、「楽しい体育」論に基づく授業では、生徒・児童が自発的に楽しさを求めていく授業というのが行われているのではないだろうか。

このように、「ベースボール型」授業において、今回見てきた視点①の「競争」からは、「楽しい体育」論に基づいた授業実践の事例研究が多く行われていたが、視点②の「学習過程」からは「楽しい体育」論とは違った、技術や戦術を習得することを目指した授業実践の事例研究も多く行われていた。

7. まとめと今後の課題

本研究の目的は、「ベースボール型」の授業の実態を明らかにすることを目的とした。分析・検討の結果、以下の事が明らかに

なった。

新体育の時代では、民主的人間形成を目指した目標、ねらいの時代であり、「球技」として位置づけられていたが、体育全体での目標から導かれている時代だった。体力づくりを重視した時代では、基礎的運動能力や運動技術の向上を目標、ねらいとした時代であり、「ボール運動」、「球技」として位置づけられ、球技の目標に基づいていた時代だった。楽しさを重視した時代では、運動への愛好的態度の育成を目指した時代で、「球技領域」、「ボール運動領域」や「ゲーム領域」から「ベースボール型」という位置付けに変遷し、球技全体での目標、ねらいから型それぞれでの目標、ねらいへと変わった時代だった。

雑誌「体育科教育」において「ベースボール型」授業は3つの時代すべてでほかの型と比べて少ない結果となった。しかし、平成20年改訂の学習指導要領にて、「ベースボール型」と型表記になったことで、授業実践の事例研究が近年増加してきている事が分かった。

授業実践におけるねらいは、新体育の時代からは時代に沿ったねらいかは読み取れなかったが、体力づくりを重視した時代、楽しさを重視した時代においてはそれぞれ時代背景に見合ったねらいであったといえる。

また、授業実践が活発化してきている平成20年改訂の学習指導要領後に行われている授業実践では、「競争」や「学習過程」の視点から見えてきた。「楽しい体育」論に基づき「競争」が行われている実践もあったが、「学習過程」においては、「楽しい体育」論に基づいていない実践が行われていることが明らかになった。

「ベースボール型」授業において、授業実践では各論者がどのような背景、目的によってそれぞれの「競争」や「学習過程」を立

て、授業実践を行っているのかを見てきた。楽しい体育論に基づいて行われていた「競争」では、どのような競争が行われているのか、技術と戦術の習得が目指された「学習過程」では、戦術学習が行われてきていたが、今後はこれらを更に深く迫っていきたい。戦術学習は「楽しい体育」論の楽しさを乗り越えるために生み出されたと考えられるが。戦術の習得を目指すことのみで授業を終えてしまい楽しさから遠くなってしまうこともありかねないのではないだろうか。もう一度「楽しい体育」論に戻って考えていくのが、今後の課題ともいえるのではないだろうか。

参考文献

- ・友添秀則(2009) 体育の人間形成論. 大修館書店；東京.
- ・国立教育政策研究所(2007) 学習指導要領データベース, <https://www.nier.go.jp/guideline/> (参照日 2014 年 5 月 10 日)
- ・文部科学省(2009) 小学校学習指導要領. 東京書籍；東京.
- ・文部科学省(2008) 中学校学習指導要領. 東京書籍；東京.
- ・文部科学省(2011) 高等学校学習指導要領. 東京書籍；東京.
- ・眞榮里耕太(2006) 小学校体育における社会性の育成に関する考察. 人間科学研究 19：P85.
- ・石黒硬(1956) ソフトボールの練習法—特に女子を中心として—. 体育科教育, 4 (6)：76.
- ・坂井正朗(1961) ソフトボールのゲームの指導. 体育科教育, 9 (4)：38.
- ・渡邊和紀(2012) 学校経営とティーボール. 体育科教育, 60 (11)：46.
- ・清水将, 浜上洋平, 中嶋基樹(2013) 守備側の判断と投能力の向上を企図した連携バックホームベースボール. 体育科教育 61 (10)：18.
- ・全国体育学習研究会(2008)「楽しい体育」の豊かな可能性を拓く. 明和出版；東京
- ・田中佐俊(1994)「どの子も特性を味わえるソフトボールの工夫—ティーバッティングソフトボール」. 学校体育 47 (6)
- ・佐伯年詩雄(2006) これからの体育を学ぶ人のために. 世界思想社；京都
- ・石井舞(2009) 小学校 6 年生のソフトバレーボールの戦術学習に関する実践研究. 秋田大学修士論文集.
- ・高橋健夫(2010) 中学保健体育科ニュース No.1/2010 年 5 月. 大修館.

